ケラビット語の１人称代名詞複数除外形／包括形の逸脱的使用

ー所有と謝罪で見られた「私たち」の選択による語彙的配慮ー

深谷 康佳 (広島大学)

1. 本研究の概要

本研究では，ケラビット語における人称代名詞の除外形／包括形に焦点を当て，特定の文脈でこれらの代名詞が逸脱的に使用されることを明らかにする．特に謝罪に相当する文脈，あるいは所有の文脈での具体的な例を収集・分析した．従来の先行研究にはなかった，謝罪文脈における除外形の逸脱的使用を確認した．所有文脈における包括形の逸脱的使用については，名詞や聞き手との関係による逸脱的使用の可能性の違いについて示した．

2. 研究の背景と課題

ケラビット語はオーストロネシア語族，西マライ・ポリネシア語族に属する．図 1 に示すように，マレーシアのボルネオ島，サラワク州北部のバリオ村を中心として分布し，ケラビット人により話されている話者 5,000~6,000 の消滅危機言語である(Amster, 1995).

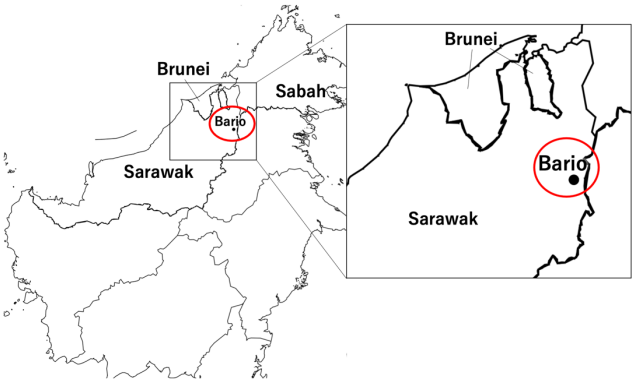

図 1: ボルネオ島・バリオ村の地図

世界の言語の中でも，ケラビット語をはじめとするオーストロネシア語族に属する言語の多くが，１人称代名詞非単数形の除外・包括を区別している．例えば，インドネシア語には 1 人称複数形に *kami* と *kita* という形式があり，除外形 *kami* は「私とあなたではない他の人（たち）」を指し，包括形 *kita* は「私とあなた（たち）」を指す（Sneddon et al., 2010: 165）．このような除外・包括を区別する言語では，しばしば本来の使用から逸脱する使用が存在することがある（Cysouw, 2005）．先行研究では主に，「実際に指示される人称」，あるいは「指示される人称とその集団」という点と，「除外／包括形の機能」という点において議論されてきた．しかし，そのような逸脱的使用については用例も少なく，詳細な情報が少ない．これについては次節で詳しく述べる．

次に，ケラビット語の人称代名詞の全体像について述べる．ケラビット語は表 1 に示すような人称代名詞の体系を持っている． 双数形に多く現れている *di(u)weh* は数詞の *duah*「2」，三数の *teluh* は数詞の「3」であり，それぞれ 1 人称接語 *kuh* の異形態 *ke*，2 人称接語の *muh* の異形態 *me*，3 人称接語 *deh* の異形態 *de* と組み合わせられ，1 人称除外形，2 人称，3 人称の双数・三数形を形成する(深谷, 2022).

表 1: ケラビット語の人称代名詞体系（深谷, 2022）

人称		単数	双数	三数	複数
1	除外形	*uih*	*ke-diweh*	*ke-teluh*	*kamih*
	包括形		*kiteh*	*teluh*	*tauh*
2		*iko*	*me-duweh*	*me-teluh*	*muyuh*
3		*iah*	*de-diweh*	*de-teluh*	*idah*

ケラビット語の人称代名詞の除外／包括形の逸脱的使用についてはまだ報告がされていない．本発表では，1 人称の複数・除外形／包括形とされる *kamih* と *tauh* を対象とし，ケラビット語にも除外形／包括形の逸脱的使用が存在するのか，それはどのような人称を指示するもので，どのような機能があるのかを明らかにする．

3. 先行研究

除外／包括形の逸脱的使用についての主たる先行研究では，除外／包括形が実際に指示している人称と，その機能という2点に着目して分析がなされている．Cysouw (2005) では複数の言語を跨ぎ，36の言語の人称標示を調べた際に確認された除外／包括形の敬語的使用について報告をし，指示する人称と機能を言語数と共に，表2に示すように分類している．

表 2 ： Cysouw (2005) による除外・包括形の敬語的使用

指示する人称／機能	包括形		除外形	
	1人称	2人称	1人称	2人称
丁寧		17言語	3言語	
謙虚	5言語			
無礼	4言語			
Bonding 1st person	3言語			

機能の列の Bonding 1st person の説明として Cysouw (2005)は，1 人称単数と除外形を指示対象とする例を挙げ，特に依頼 (requests) と提案 (offers) を行う際に包括形を使用することで，聞き手と話し手との結びつきを強調し，聞き手もその依頼や提案を望むかのように振る舞うと述べている (Cysouw, 2005: 219-221)．謙虚や無礼な1人称指示の場合は語彙化している例が多いのに対し，Bonding 1st person の場合は語彙化していない点が，この2つの違いであるが明確には分けられていない．

Lichtenberk (2005)では，オーストロネシア語族において，主に包括形の逸脱的使用を対象に，指示する人称とその集団と機能について表3のように分析した．人称指示が明確な場合は2通りある．まず，包括形を使用することにより，実際には部外者である聞き手を話し手の集団に属するように振る舞う「1人称 (とその集団) 指示」では，自分を弱め，謙譲のような機能を持つという (Lichtenberk, 2005: 275)．次に，包括形の使用により実際は部外者である話し手を聞き手の集団に属するように振る舞う「2人称 (とその集団) 指示」では，聞き手の考えに話し手が寄り添い，尊敬のような機能を持つとされている (Lichtenberk, 2005: 275)．非人称，非指示の例は一般的な事実を述べる際に使用されるとしているが，どのように判断すべきか明確でない場合も多いとされている．

表 3 ： Lichtenberk (2005)による包括形の特別な使用

実際に指示する人称	1人称（とその集団）	2人称（とその集団）	非人称，非指示
機能	自己特性の抑制，自分を軽視する	聞き手の希望や感情を話し手自身のものにする．	人間の活動・行動，一般的な事実を述べる．

ここでの包括形の1人称／2人称指示は，上の Cysouw (2005) の場合とは，語彙化していない例を多く示しているという点で異なる．除外形について，Lichtenberk (2005: 284) では，包括形のような意味論・語用論的な発展の影響は受けていないと述べている．語彙の意味として既に固定され語彙化した，除外形を1人称謙譲として使用するミナンカバウ語の例などを挙げているのみである．

これらの研究の問題点としては，Cysouw(2005)が自身でも述べているように，示された言語の例が散発的なものであり，詳細な調査がされていない点が挙げられる．Lichtenberk (2005) では包括形について多く述べられているが，除外形がどのように逸脱的使用をされているのかは，例が非常に少ないため明らかでない．従来の使用とは異なる使用であるため，確認される数が少ないという理由はあるが，本研究では逸脱的使用の有無だけでなく，現時点で可能な限りの情報の提示を試みる．先行研究で触れられていた，実際に指示する人称とその機能だけでなく，文脈や話者と聞き手の関係，どのような語とともに使用されるかを示す．

4. 研究方法

本研究では，2023年3月～10月にかけて，バリオ村での対面調査とオンライン調査を行った．対面調査では，人称代名詞についての例文を幅広く収集するために，調査票を作成しそれに沿って調査を行った．人称代名詞の逸脱的使用について言及された点について，例文や会話を作成してもらい収集する調査を行った．オンライン調査では，帰国後に生じた疑問について，「対面調査時はこのような例文を作成していたが，別の場合はどうなるか，除外／包括形は使用可能か」など，対面

調査の補足の質問をした．調査の主たる協力者である言語コンサルタントはバリオ村に生まれ育った A 氏 (60 代男性)と B 氏 (50 代男性)である．収集した逸脱的使用の例は，それぞれの文脈等出現状況(場面，話者と聞き手の関係) に基づき整理し，ケラビット語の除外／包括形がどのように使用されるかをまとめた.

5. 結果

調査の結果，ケラビット語において，除外形と包括形のそれぞれについて，逸脱的使用が確認された．除外形の逸脱的使用は，謝罪に相当する文脈において見られ，包括形の逸脱的使用は，所有の文脈において観察された．以下，それぞれについてその例と文脈，その例における指示される人称と，逸脱的使用のはたらきについて示す.

5.1. 除外形の逸脱的使用

聞き手を含む文脈であるのにも関わらず除外形が使用される例は，次の例文(1),(2)で示す通り，本調査においては謝罪に相当する文脈に観察された．以下，文脈と，実際に指示される対象と，使用される形式について述べる．(1)は，踊りのグループで，構成員の一人が失敗してしまった時，リーダーが失敗してしまった人に対して話す場面である．実際には聞き手 (失敗した人) を含む文脈であり，実際の指示対象は聞き手を含む「私たち」であるが，除外形 *kamih* を用いている．(2)は，ある家族がパーティーを開いた際，共同ホストである家族がいる場で，ホストとゲスト全員に向かって話す場面である．ケラビット人は伝統的にはロングハウスに住んでおり，この例文を発話した話者は最大 47 家族が居住可能なロングハウスに居住している．パーティーのホストは話者を含む，ロングハウス内の隣のセクションに住む親族たちであり，ゲストはロングハウスの他のセクションに住む者や近隣の村に住む者である．聞き手 (ホストの一部) を含む文脈であり，実際の指示対象は聞き手の一部も含んだ「私たち」であるが，除外形 *kamih* を用いている.

(1) 除外形の逸脱的使用 1

mutu’	doo	kadi’	kamih	neh	pe-salah
treat	good	because	1PL.EXCL	PT	RECIP-mistake

Sorry (lit. Treat me well). We all make mistakes.

(2) 除外形の逸脱的使用 2

kamih	dengeruyung	mutu’	doo	na’am	sukup	nukenan
1PL.EXCL	relatives	treat	good	NEG	enough	food

We relatives apologize for the insufficient amount of food.

言語コンサルタントによると，例文(1) における除外形の逸脱的使用は，失敗をした人に責任を負わせるのを避け，連帯で責任を負う目的で行われているという．また，例文(2)における，*kamih dengeruyung mutu doo’* というのは催しを行う際の挨拶の一種の定型化した表現でもあり，問題があった場合の責任を話者の家族が負担し，ホスト側である近い親族に負わせるのを避ける目的で行われているという．(2)では主たる聞き手がゲストであることからも，逸脱的使用でない可能性もある.

5.2. 包括形の逸脱的使用

聞き手を含まない文脈において包括形が使用される例は，名詞の所有を表す際に多く観察された．(3)で示す例の実際の指示対象は話し手のみである．話し手が所有するものであり，聞き手がそれを所有していないことを知っているが，「私の」と表現すると所有を誇示するような表現になってしまうため，包括形 *tauh* を用いているという.

(3) 包括形の逸脱的使用

a.	lati’ tauh	私たちの田んぼ	d.	tungul tauh	私たちの刀
b.	ruma’ tauh	私たちの家	e.	bekeng tauh	私たちの籠
c.	la’al tauh	私たちの鶏			

(3)の例は聞き手との関係に関わらず使用可能である．言語コンサルタントによると，年配者はこのような使用を好む傾向があるが，若年層は逸脱的使用をせず，実際に指示する人称の代名詞のみを使用することが多いという.

しかし，このような包括形が使用不可な場合もある．ここで， 1 人称単数しか用いることのできない例を(4)に示す．(4)で示した例は，1 人称を指示対象とするもので，聞き手は物を所有していない点で (3)と共通するが，*uih/kudih*（1 人称単数）「私（の)」のみを用いる例である．聞き手が誰であっても，(3)のように包括形は使用できず，1 人称単数を使用する.

(4) 必ず 1 人称単数を使用する場合

a. *awan tauh　　*私たちの夫/妻 → awan uih/kudih 私の夫/妻

b. *peta tauh　　*私たちのペタ(伝統的な女性用帽子) → peta uih/kudih 私のペタ

c. *tapung tauh　　*私たちのタプン(伝統的な男性用帽子) → tapung uih/kudih 私のタプン

包括形を使用し所有者を示す逸脱的使用では，このように使用できる名詞と使用できない名詞がある．例えば，*kanid*「兄弟/姉妹」は誰に対しても「私たちの兄弟」と言うことが可能である．しかし親族名詞の中でも *tepu'*「祖父母」や *anak*「こども」は同じ集落の者に対してのみ可能であり，*tama*「父」*sina*「母」は使用できる対象がさらに近い親族へと狭まるという．このように，使用可能か不可能かが綺麗に分かれるわけではなく，名詞などにより異なっている．

5.3. 逸脱的使用の状況まとめ

ケラビット語の包括形／除外形の逸脱的使用の例についての結果をまとめると，次のようになる．

表 4 ： ケラビット語除外／包括形の逸脱的使用まとめ

実際の指示人称 ＼ 形式	1 人称指示	1 人称+2 人称指示	機能
除外形		謝罪相当の文脈で確認	聞き手への責任の軽減
包括形	所有の文脈で確認		所有の誇示の回避

第一に，ケラビット語においても逸脱的使用が存在するということが明らかになった．第二に，今回収集したデータでは，謝罪に相当する文脈で除外形の，話し手と聞き手を指示対象とする逸脱的使用が確認された．所有の文脈でも包括形の，話し手を指示対象とする逸脱的使用が確認された．除外形に関しては，*kamih* という形式に 1+2 人称の意味が含まれるのではなく，謝罪時の特別な使用である．包括形に関しても，*tauh* という語彙の中に 1 人称指示の謙譲としての意味が含まれるのではなく，Lichtenberk (2005)の示したような包括形の特別な使用である．「私たち」という語彙を選択する場面で，配慮として除外形／包括形が逸脱的使用をされていることが確認された．

6. おわりに

本研究では，ケラビット語の包括形代名詞の除外形／包括形の逸脱的使用について記述を行った．除外形と包括形，ともに逸脱的使用が可能であることを示した．除外形の逸脱的使用は謝罪相当の文脈に見られ，聞き手の責任を軽減するために使用されること，包括形の逸脱的使用は所有の文脈に見られ，話し手がものの所有を誇示することを避けるために使用されることが明らかとなった．

ものの所有者を示す包括形の逸脱的使用については Lichtenberk (2005) の 2 人称とその集団を指示する包括形の特別な使用の例でも確認されている．例えば，Kéo 語 (インドネシア) では，同様の例として「私の水牛」と言う際，包括形を使用し所持を誇示することを避ける例が示されている(Lichtenberk, 2005: 267). しかし，ケラビット語のように使用可能な名詞と不可能な名詞があることについてはこれまでに言及されていない．包括形の逸脱的使用が不可能なものは，ケラビット文化的に譲渡不可能である装飾品や配偶者であった．家畜や刀，籠などの所有物は譲渡可能性が高く，逸脱的使用の可能／不可能と譲渡可能性との相関関係が見られる可能性もあるが，これは今後の課題としたい．

略号　1 1 人称／EXCL (exclusive)除外形／NEG (negative)否定辞／PL (plural)複数／PT (particle)小辞／RECIP (reciprocal)相互態

謝辞　本研究は三島海雲記念財団 2022 年度（第 60 回）学術研究奨励金の援助を受けたものである．記して謝意を表する．

参考文献

Amster, Matthew H. (1995). *Kelabit-English, English-Kelabit glossary: A concise guide to the Kelabit language*. Kuching: Rurum Kelabit Sarawak.

Cysouw, Michael. (2005). A typology of honorific uses of clusivity. In Elena Filimonova (ed.), *Clusivity: Typology and case studies of inclusive-exclusive distinction*, 213-230. John Benjamins.

深谷康佳. (2022). ケラビット語バリオ方言の記述文法, 博士論文, 広島大学.

Lichtenberk, Frantisek. (2005). Inclusive-exclusive in Austronesian. In Elena Filimonova (ed.), *Clusivity: Typology and case studies of inclusive-exclusive distinction*, 261-289. John Benjamins.

Sneddon, J.N., Adelaar, A., Djenar, D.N., Ewing, M.C., (2010). *Indonesian Reference Grammar*, second ed. Allen & Unwin, Sydney.